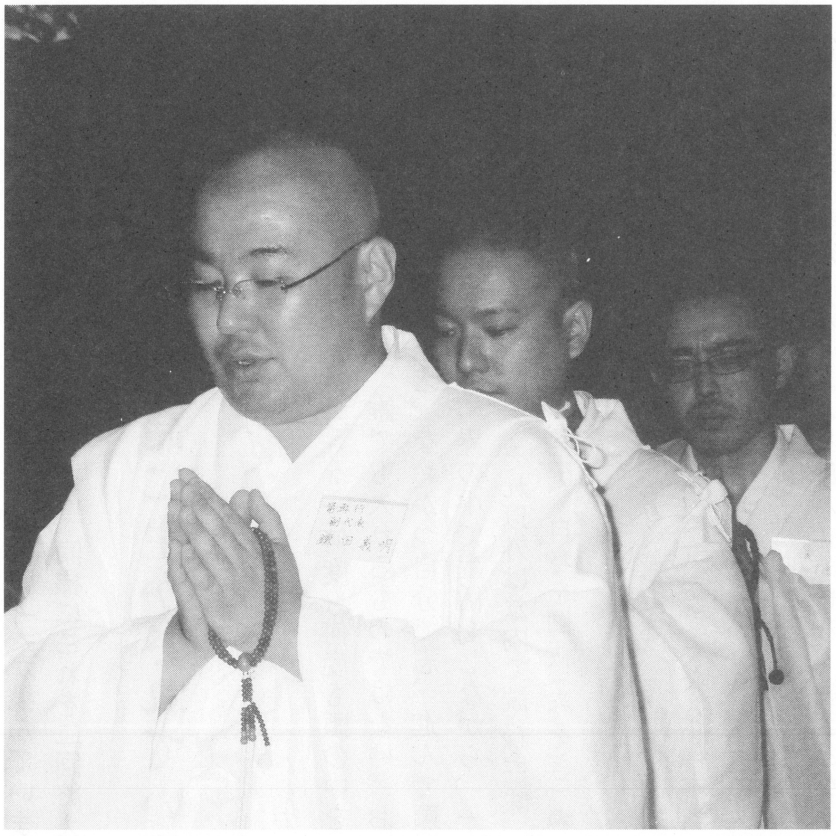


妙の光

通刊88号　**復刊68号**

2009年12月1日（季刊）

角田山妙光寺 発行

〒953-0011
新潟市西蒲区角田浜1056
TEL 0256-77-2025

鎌田上人『遠壽院』荒行中

十一月一日から翌年二月十日までの寒百日間にわたる行は、大荒行として知られ、四百年来の伝法法式に則して行われる遠壽院流祈祷修法の相伝加行である。筑波おろしの吹きすさぶ厳冬のさなか、午前三時の初水から夜十一時の最後の水に至るまで、水行肝文を高唱して行う七回の水行をはじめ、すべて白粥、まとう単衣の衣に至るすべてにわたり酷烈を極める。

起床は午前二時半。水行は三時、六時、九時、十二時、十五時、十八時、二十三時と行われる。食事は朝五時半と夕方五時半の二回のみ。これ以外は全ての時間、膨大な量の法華経を一日何百巻も読経し、撰法華経を写経し、相伝書の書写行も行う。（『遠壽院』HPから参照）

別紙ご案内のように、一月千葉県市川市中山の『遠壽院』に、団体参拝を兼ねた行中見舞いを、また修行明けの帰山奉告式を二月に、厄除け祈願祭を兼ねて計画しています。ご参加下さい。修行中に祈願を依頼したい方はお知らせ下さい。（写真は十一月一日入行の際）

二回目の寒百日間の荒行に鎌田上人が挑んでいます。四月から妙光寺に勤務する永石上人（三十四歳）は、「法華経寺」の荒行堂ですが、同様にこれを二回終えており、その体験を書きました。

「大いなる命に生かされている己」を体感した荒行

永石光陽

「俺は何をやってんだろう？」何度も何度も頭の中をめぐる。百日行とは、誰でも入れるものではない。お寺を空ける条件を整え、なおかつ自分で志、進んで願う者だけに許される。結界の中で生活をしながら、一日七回の水で身を浄める。それ以外は堂内で読経三昧。毎日睡眠時間二時間少々の中、自身を御祓（みそぎ）ぬくのである。

行中は、一日一日がとても長く感じる。それが百日となると途方もない日々に思え、気が遠くなる。「本当に自分はここでやっていけるのだろうか？」望んで入行したにもかかわらず、不安や疑問に幾度も直面する。その度に自分に負けまいと奮い立たせる。幾度となく繰り返す葛藤の中で、自分自身を見つめ直す。

決められた課行以外の生活も行僧で補う。食事を作ったり、水行の用意をしたりと、行僧それぞれに役割が与えられる。各自が役目に責任を持つことで修行僧全員の生活が成り立つ。初めて入行する者、二回、三回と何度も入る者、それぞれ立場が違い、求めることも違ってくる。初めて入る者は、行者の心得の根幹を自身の体で行うことで整え、日蓮宗独特の祈祷法、木剣祈祷を修めていく。そして、二回目に入る者には、初めて入る者を叱咤激励しつつ、行全体を円滑に行うべく自分の時間を割く。初めて入った時とは求められることが違う。それは、三回目、四回目でまた違う。

立場も役目も違う全行僧に一貫して言えることは、行中いろんな自分自身と向き合わなければならないことだ。醜い自分がふと出てくる。「もう少し寝たい」「人より楽をしたい」「おいしい物を腹一杯食べたい」等々。それどころか「もうこんな生活したくない」「なんでお坊さんになってしまったのだろう」と後悔の念まで吹き出す。すると、その後ろ向きの気持ちが、より一層水を冷たく感じさせ、眠気をどっと引き起こす。醜い弱い自分を認識させ、そんな「今ある自分を悔いていく」ことを幾重にも繰り返す。その中から自分に備わる、芯なるものをしっかりと見いだしていく。百日での修行の肝要なことの一つである。

毎日七回の水行も日を追うごとに変わってくる。最初冷たく感じた水も、次第に刺さるように痛く感じ、寒さ極まる頃には重いものがドスンと上から落ちてくる感覚を受けるようになる。そこまでして身を浄める。なぜそんなに浄めることが必要なのであろうかと、疑問に感じる人がいるかもしれない。何か特別な力を身につけ、特別な存在になる為ではない。私は身を浄めることで、本来自分自身に備わっているものを見いだしていく姿ではないだろうかと考える。

極限の状態に追い込まれた時、私は不思議なことを体感した。初めて荒行に入行した時のことである。今までの生活が一変した状況で、最初の三日間、食事のお粥が全くのどを通らなかった。もちろん、ゆっくり食事を頂く時間などない。短い時間に胃に流し込むように皆が食べていた。「飯を食べないと持たない」そんな焦りが吐き気となり、より一層食事を通らなくさせた。空腹を感じなんとか凌ごうと、水行前の水を飲んで体力を持たせようと必死になった。このままでは持たない。如実に体の変化となって現れ、急激な衰弱を感じた。あまりに食べられない私を見かねた先輩僧が、「遊びに来たんじゃねえ、食べるのも行だ、食エッ」と一喝。意を決し喉に押し込み、胃から逆流するお粥を手で塞ぎながら、すぐに水行場へと走った。しばらくして水行で冷えた体が、胃の中心から体の隅々へと熱を伝えだんだんと暖まり、力が湧いていくことを感じた。『食して命を得ている』と思った。今でも忘れられない。『大いなる命に生かされている己』を感覚として刻んだ時だった。

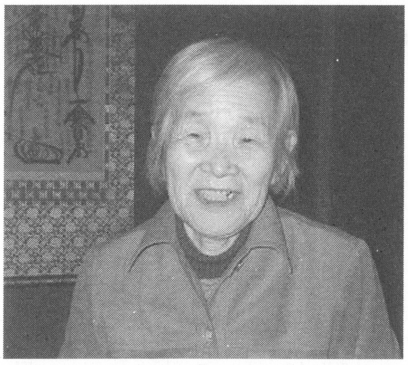
当たり前のこと、誰もが日々積み重ねていることである。日常にあることが今更ながら特別に感じた。以後日を追って研ぎすまされていく五感と変わる自分の意識は、元来自分に備わっているものや支えているものを気づかせてくれる。必死な毎日にふと家族のこと、檀徒の顔、送り出してくれた多くの人のことを思い出す。また身近なことや周囲のことに気づいていなかった自分に気づく。目先のことしか考えていない、惨めな自分を知る。それ故に百日を終えると、以前とは違う自分を感じる。変わるというより、余計なものを削ぎ落としながら、本来備えていた姿に還っていくように感じた。

この荒行で目指すべき所とは何であろうか。それは一つの雑巾だと私は考える。水で自分の身を浄めては、周りを自分で清めていく。自身を汚しては、また清め、汚れる。周囲の心の垢を拭っては清める。雑巾の姿に仏教でいう菩薩行の姿を重ね、イメージする。なぜ行を修めるのかとは、まさに自分と周囲の垢を拭うためではないだろうか。これを「化他行（けたぎょう）」という。もし、百日行に入る修行僧が、このことを忘れてしまったら、それはただ単に自己満足でしかない。だからこそ、この荒行はあくまでも自身を高める為だけの修行を目的としない。

信心

幼い頃から欠かさないお寺参り

曽根　遠藤　トシさん（八十一歳）



「ウチは私で四代目です。弟は幼くして病死、その下を妊娠中の母親が転んだことが原因で母子ともに死んだと聞かされました。母が三十二才、私が九才のときで、以来父親に育てられました。父親は新潟の香月堂という和菓子屋で修業した菓子職人でしたが、母親が亡くなって手が無く、店を閉じて主に弥彦の菓子屋に勤めていました。

この父親と幼い頃からずっとお寺参りを続けてきたので、今もお寺の全ての行事は欠かしません。老人クラブの旅行も誘われますが、お寺参りが一番好きです。バス路線が廃止になってからは、一人息子が送ってくれます。私のお参りする姿を見ていて欲しいのです。帰りは近所の真島さんにお願いして乗せてきてもらいます。

一人娘の私が婿を迎えましたが、息子夫婦とは同居はしていません。可愛い孫娘二人も成人しました。四年前に先立った夫は鋳物の職人で、燕の工場に何十年と通いました。私は七回、本山の身延山にお参りし、七面山にも二度登らせてもらいました。そのうちの五回は夫と一緒で、とてもいい思い出です。

若い頃は愛知県の紡績工場や、東京で当時の皇太子様の警護役の偉い方のお宅で働いたこともあります。結婚してからは近所の甘納豆工場で二十年近く働き、辛いこともありましたが真面目に勤めて感謝されました。今でもそこからお菓子が届きます。

毛糸を織って色々作るのが趣味でしたが、最近は根気が続かず、もっぱらタオルで雑巾を縫っています。糸を二重にして縫うから丈夫で、お寺で使ってもらったり、近所の銀行に上げたりして喜ばれています。手を動かしていればボケないかと思ってね。

一人暮らしは全て自分でやらないといけないので大変だし、寂しくないと言えば嘘ですが、これも宿命だと思ってます。先日近所のスーパーで幼馴染と遭いましたが、だんだんあの世が近づいてきたけど、お互いになるべく自分のことは自分でできるようにしていたいね、って話しました。今は健康でいられるし、ご前様から生前戒名を戴いているんで、何の心配もありません」。

寺の動き

●身延山・七面山団体参拝

山梨県にある日蓮宗総本山身延山久遠寺と、七面山への団体参拝を行いました。

身延山は、日蓮聖人が晩年の九年間「法華経」を読み、弟子や信者の教育に勤められた地です。「日蓮が弟子檀那らはこの山を本として参るべし」と遺され、お墓が建てられました。その西方にある七面山は海抜一九八二m。法華経信者をお守りする七面大明神が祀られ、山頂近くには最大二千名の参詣者を収容する『敬慎院』というお寺があります。

十月四日朝、新潟を大型バスで出発して午後二時前に久遠寺着。本堂前で東京方面からの参加者と合流して総勢四十五名。檀信徒、安穏会員の四十代から八十代までの男女、皆さん妙光寺にご縁のある方々ばかり。

曇り空でしたが真新しい五重塔の拝観はじめ、本堂での法要、隅々までの拝観、そして特別に布教部長直々の法話をいただきました。そして宿坊に泊まり、翌朝のお勤めに参列するなど身延山を堪能。広大な境内を歩くだけでも大変ですが、新設された斜勾式エレベーターに随分助かりました。

二日目は二組に別れ、七面山登詣組は、永石上人を先導に平均四時間の登山参詣。山頂近くの『敬慎院』で厳粛な夜の法要に感激し、重なり合うように就寝。生憎両日とも雨で、期待の富士山から昇るご来光には遭えませんでしたが、翌日昼前には全員無事下山で

きました。

諸寺参拝組は身延山奥の院参拝後、甲府の遠光寺に参拝。貴重な宝物の特別拝観を許されるなど、歓待いただきました。途中に観光をはさみ大月の橋倉鉱泉の宿で温泉を満喫。三日目の昼に下山した七面山組と合流し、帰路松本の神宮寺を訪問。高橋住職のお話を聞き、安曇野で蕎麦の夕食。お酒も入って車内は大賑わいで、夜新潟に帰着しました。

●七面山登山参詣の感想

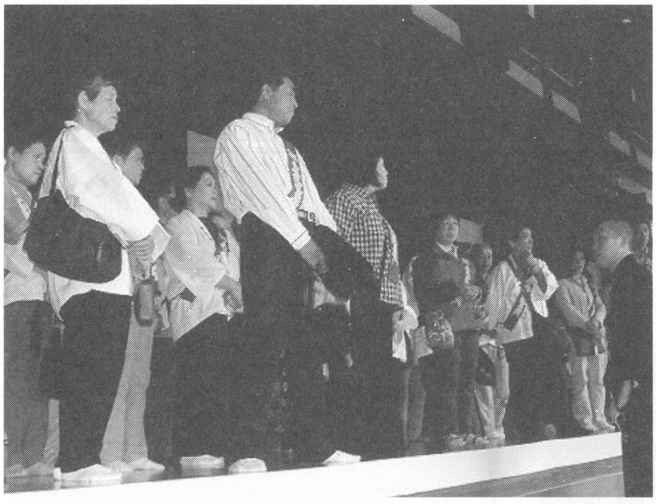
参加された一部の方ですが、感想文をいただきました。

五十年目の思い

安藤　義則　七十七才

「今年団参に一緒に行って、七面山に登らんかね」とご前様に誘われたのは、一月に亡くなった妻の葬儀の後だった。お盆の時もう一度ご前様に誘われ、息子に後押しされ、再び七面山に登ることを決意した。

身延山・七面山に参るのは今度で二度目。約五十年前の昭和三十八年、先代のご前様たちと、母のお骨をたずさえ登って以来のことである。私の母は一度七面山へ登りたいと言っていたが、遂にその願いは叶わなかった。その時、私は二十九歳。結婚してはいたが、幼い子供もいたので一人での参加となった。定年後今度はいつしか妻と一緒に登ろうと思っていたのだが、病気がちの妻とはとうとう一緒に登れなかった。



久遠寺本堂で説明を聞く

前回、三時間半で登れた道のりも、今度は五時間以上かかった。みんなの迷惑にならんようにと、遅れまい遅れまいと頑張ったものの、歳には勝てなかった。それでも最後まで登りきり、山頂の鐘を鳴らしたとき、五十年前の思いと、今度の思いが幾重にも重なった。何とも言えなく、ありがたい気持ちで満たされた。鐘の音は、私の心に確かに残っており、遠い昔の思いを引き起こす響きとなった。

今度の登詣で、私の腹巻には一つのペンダントを携えていた。それは、妻の遺影と一片のお骨を入れた女性用に作った特別なペンダントである。妻と一緒に登るという、長年はたせなかった思いはようやく叶ったかなと思う。このペンダントをいつかは九州に嫁いだ娘に託したいと、女性用に作った。

山に登って帰ってきて思う。二回ともそれぞれの思いを背負って登れた。一緒に行って来てよかった。体の調子を見て、

できれば次も参加したいなと思っている。

「感謝」と「縁」を再認識

笹川良子　五十五才

私は、縁あって、三年前から、安穏スタッフとしてお手伝いさせて頂いております。そして、一度は皆様と「身延山・七面山参拝の旅」をしたくて、参加致しました。

曇り空の下、「お万の滝」での永石上人のお経で、登詣開始です。次第に前にも後ろにも人影はありません。少々心細く感じますが、道標が立っていて、「五丁」「六丁」と増えていきます。苦しくても、一歩進めば、一歩山頂に近づく喜びがあります。途中から小雨になり、傘をさして登ることに。この七面山の雨は、なんとも清らかで絹のような美しさで、全く苦になりません。

「二十丁」の道標を確認し、ひと呼吸して思ったのです。道標に自分の歩んで来た人生が重なってみえたのです。「二十一丁」「二十二丁」…「二十四丁」は結婚した歳よね…。「二十五丁」で長男を出産。「二十七丁」は次男を出産。そして「二十九丁」…「二十九丁」ではもう景色はにじみ、目はショボショボです。「二十九丁」では、その年突然に逝った夫に「何で、こうなったのよ！」と恨んでも、返事が返って来るわけもありません。

七面山・敬慎院本堂前で

一歩一歩、ただ黙々と、無心で登ります。今こうして七面山を登っていられる私は、幸せですよ。指を折って数えても、かなり幸せがあるもの。

仲間との登山とは違う経験でした。五十五丁の敬慎院で温かいお風呂を戴き、般若湯をたっぷり戴き最高です。

この旅は、「感謝」と「縁」を再認識するものでした。

初参加して

津野洋子　六十七歳

初めての参拝登山は生憎の雨模様でありましたが意外と苦にならず、登り始めは少し調子悪く心配でしたが、二十丁目あたりから汗がジンワリと、清水坊で食べた朝食のおかわりがエネルギーとなって、エンジン上昇。体が軽くなりました。

私のような参拝初心者がこの山に登れたのも、周りの方々の「ゆっくり登

ろう」の掛声と、よく補修された登山道が登りやすかったからです。約五時間かけて登り切り、太もも、脹らはぎがパンパン状態で宿坊の玄関にたどり着いたら、先発隊の人たちが出迎えてくれました。すでに奥の院に行って御朱印を押していただいて来たとか。これから一時間かけて又歩くのかーとためらいましたが、一緒に登ってくださった丸山さんの御主人が同行して下さるとのことで一瞬気合いが入り、足が動き出しました。

夕暮れも近いし、雨だし、急がないと。やはり男性の足は速い！そのスピードについて歩いた私も偉い！なんとか御朱印を押していただき、無事に暗くなる前に帰る事が出来ました。おかげ様で大きな岩も見ることが出来、七面山には裏参道もある事がわかりました。ぬれた着衣をボイラー室で乾かし、ホッといたしました。

今回の登山はあくまでも参拝登山。行く先々で朝夕の御仏前でのお勤め、修行僧達の背すじのピーンとした空気、私の日常には無い緊張感。これを機に少しでもお経の練習をしようと思いました。それから宿坊のスタッフの方々や、松本の神宮寺様から受けた『おもてなしの心』感銘いたしました。それからこのたびはご前様始め、奥様、永石上人のきめ細かな配慮をいただきありがとうございました。

親子で参詣して

三　輪　勝　彦　五十五才

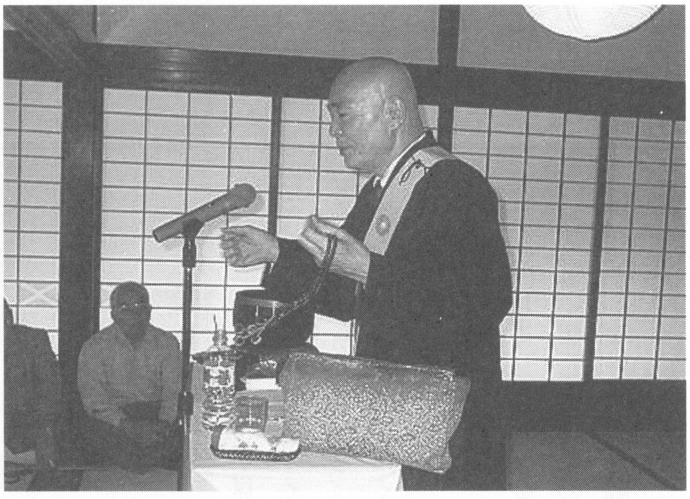
私は二度目の参詣でした。前回は母と一緒に七面山に初めて登りました。今回は、母は諸寺参拝組で、私は一人七面山に登ってみたく参加させてもらいました。出発前、体調が悪かったのですが、七面山を下りてバス送迎所に着く頃、不思議にすっかり体調が良く、心身ともに明るく軽くなっていました。この旅でご前様の登詣心得、永石上人の体験談、思い出話他、山を登る途中、荷を背負った男性が唱えていたお経の声の良さ、山での入浴や食事、そして山でのお勤め等々、有意義で忘れられない参拝となりました。本当に有り難うございました。

七面山・敬慎院での夕食

●お会式と授戒式

十月十三日の日蓮聖人ご命日の法要を〝お会式〟と呼びますが、その第七二八遠忌お会式を十一月八日に営みました。併せて生前に戒名をお付けする授戒式にも、今年は少な目の八名が希望され、総勢で八十余名の方々がお参りくださいました。

祖師堂での法要



大島上人の法話

九時から授戒者研修、十一時の法要に続いて当番の手作りのお斉の後、横須賀市の大島龍穏上人の法話をじっくりお聞きしました。大島上人は神奈川県警の刑事歴三十五年、退職されて五十五歳で僧侶の道に飛び込み十年、寺をもたず、多くの人々の悩みを聞き、また犯罪被害者の供養を続ける毎日です。穏やかな顔で語る修行中の失敗談や日々のお話からは、〝鬼刑事〟と恐れられたとはとても想像つきませんでした。来年は十月の予定です。

●本堂イスに座布団とひざ掛け

本堂の木の椅子はお尻が痛くて冬は冷たいとの声で、座布団購入のご協力お願いをしましたところ、複数の方からお代を、注文してから私が縫いますとのお申出もいただきました。また花久葬祭㈱からはひざ掛けの寄贈を戴きました。皆様ありがとうございました。本堂後ろ側に常備しますので、ご利用ください。

●四菩薩像の金泥入れ

昨年、ご本尊のお釈迦様像を一部修復の際、〝金泥書き〟といって金筋の線模様を書き入れました。お像の桧の木肌に、着衣のひだと模様がややくすんだ金色に光るのが角度によって見える程度ですが。同じ様に脇侍の四体の菩薩像にも金泥書きを施すため、このたび滋賀県の仏師の工房にお運びしました。二月中旬までに仕上げてお戻しする予定です。

●菊花展示

すっかり恒例になりました菊花の展示ですが、今年も内藤清さん（巻）、河村一良さん（松山）が丹精込めた鉢を展示されました。一ヶ月あまりの期間、秋の彩で玄関が華やかになり、皆さんが感心して眺めていました。

●参道入り口拡張

公道（市道）より境内の駐車場に入る道路の角から、住宅が数件並んでいます。その住宅に目線が行くようで、「妙光寺入口」の看板はあるのですが見過ごして入り口を通り過ぎる方が多くいます。また道路の角度が変形なうえ、一部が狭いため大型バスが通りにくいといった問題もあります。

数年前に角地の地権者（百坪弱）に譲って欲しい旨交渉しましたが、金額が折り合わず諦めていました。このたび先方から「別荘にしていたが高齢で不要になったので買って欲しい」と言われ、金額も相場に近いところで折り合いがつきましたので、費用を借入れして購入しました。

右手の住宅が更地になります

年内には更地になり、ゆくゆくは植栽し門柱を建てるなど、正面入り口に相応しい整備をしたいと考えています。急な話で計画も未定、資金も当てがありません。永久に残るものになります、ご協力いただけます方がおられましたら幸いです。

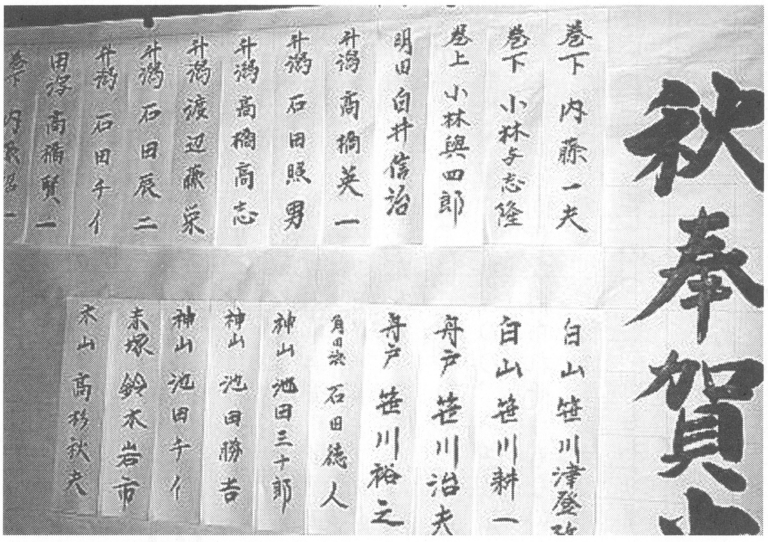
●「杜の安穏」増設計画

世間で墓や葬儀の変化が起きて二十年が過ぎ、「安穏廟」の歴史と重なるところから「安穏廟」はその起爆剤の一つとも言われます。そんなことから最近またマスコミの取材が増え、付随して申し込み希望者が増えています。

用地を確保して「杜の安穏」の形式で増設を準備中で、行政の内諾は得ましたが膨大な申請書類を揃えるのに手間取っています。来年三月着工を目処にしています。

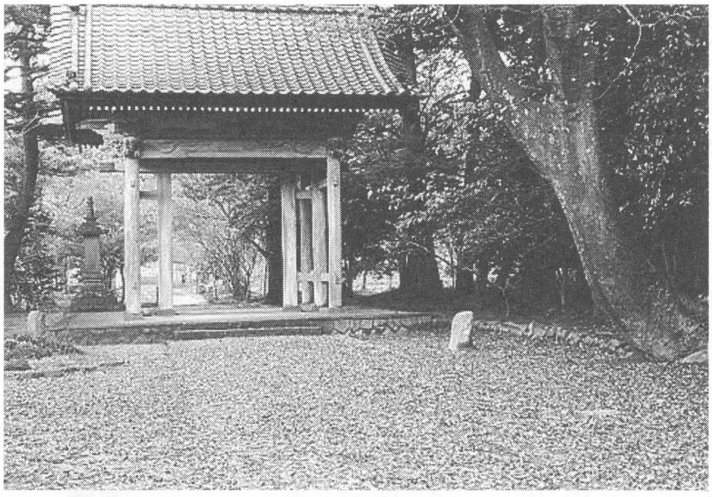
●秋奉賀のお礼

毎年秋、農家の檀徒の方々から新米の奉納をいただきます。今年も多くの方々からいただきました。祖師堂ご宝前にお供えし、お名前を堂内に掲示させていただきました。お礼申し上げます。



●落ち葉掃き

境内の落ち葉掃きボランティアならぬボラン寺を前回お願いしましたら、十数名の方からお申し出を戴きました。その方たちには直接お知らせしましたが、左記の様に作業予定を立てましたので、さらにお気持ちのある方はお願いします。



境内の落ち葉

二回目

・十二月十五、十六、十七、十八日（四日間）
・午前九時～午後三時
・都合のつく日のみで可
・昼食は持参下さい。お汁は寺で用意します。
・荒天の場合中止します。
・用具、軍手は寺にあります。
・事前申込不要。直接お出かけ下さい。

あんのんのページ

「任意後見」のお勧め

引き続き〝葬儀の生前契約〟のご相談があります。一方で、相談しただけで書類にしなかったため、ご本人の希望が叶えられなかった例もありました。また書類にしたものの、いざとなったら親族の同意が得られそうもない事情だと言うので、弁護士を交えた相談をして見通しのついた例もあります。

一人暮らしで親族も遠いAさんは、遺言書と葬儀の生前契約は完璧に出来ていました。ところが心臓病で倒れて救急車で運ばれ奇跡的に助かりました。幸いにも近所の親しい母娘がお世話くださるのですが、他人なので病院の保証人にもなれないし、銀行から預金を下ろして病院費用を支払うことも出来ません。唯一の姪も、遠方なうえ仕事があって思うようには動けません。姪であってもキャッシュカードと暗証番号がわかれば別ですが、銀行の窓口で預金を下ろすことができません。

そこで遺言書を依頼した弁護士が、公証人、銀行員を伴って病院まで出向き、その近所の親しい母娘を代理人にする、「任意後見」の手続きを行うことになりました。心肺停止状態があったにもかかわらず、奇跡的に脳に障害が残らなかったから出来たことです。認知症など判断能力がないと、裁判官が病院まで出向いて「成年後見」の手続きが必要となり、大変です。

近くに信頼できる親族がいない場合は、公証人役場で「任意後見」の手続きをすることをお勧めします。親族でも「任意後見」が必要な場合もあります。〝葬儀の生前契約〟をお考えの方は「任意後見」を、また延命治療は不要だとお考え方は、その意思表示も必要です。

数々のご相談をお聞きし、こうもひとり一人の事情が違うものかと、改めて驚かされます。妙光寺では弁護士など専門家の紹介を含め、可能なお手伝いをしていますので、気軽にご相談下さい。

「一人暮らししているたった一人の妹が末期ガンです。もしものときは東京から連れて行きたいのですが」という電話がありました。都内の葬儀社を紹介して一ヵ月後、お姉さんの長男が付き添って都内の病院から妙光寺までご遺体を搬送。群馬に住むそのお姉さんの家族がそろって、妙光寺の京住院で葬儀を営みました。故人の希望通りになったと、とても喜ばれました。色々あった秋でした。

寺庭から

「ライフライン」

小川　なぎさ

爽やかな秋を通り越していっきに突入といった感じで冬になってしまいました。少しずつの気候の変動は地球温暖化という言葉でいろいろな所で問題になっていますが、自分の生活を見ても、半年も灯油をたいて暖房をするというのはやはりおかしいと思いながらストーブをつけて、その暖かさにほっとしているこの頃です。

さて秋の夜長をいかがお過ごしですか？私は夏に手のひらサイズのビデオを見る機械を衝動買い（笑）してしまったのですが、これが夜の楽しみになりました。そして韓国のドラマにどっぷりとはまってしまいました。でもヨン様でおなじみのイケメンや恋愛ものではなくて、時代劇や家族のドラマの人間模様や会話が面白い。早めに布団に入ってドラマを見るのが楽しみです。そしてもう一つ、娘からお古の携帯音楽プレイヤーをもらい、その中にたくさんのお気に入りの音楽を入れて聴いています。携帯電話の半分の薄さの機械に今は百曲位入れています。（技術の進歩はすごいですね。新しいものには四千曲も入れることが出来るそうですよ）それを散歩や掃除のとき耳にはめているととても集中して聴く事が出来るので楽しいです。クラシックがほとんどですが、今の一番は佐渡裕指揮のラフマニノフのピアノ協奏曲で、ピアノは辻井伸行。すごく穏やかで優しい演奏が心に響き、ささくれだった気持ちを落ち着かせてくれます。

今年はお寺参りにも何度も連れて行ってもらい、声を出してお経を読むことも出来るようになりました。いまさら私がいうのも変ですよね。でもようやく正直な自分の気持ちとして信心が湧いてきたというか・・・。一年半の間、心が死んだようになって時間を過ごしていたことを思うとまるで生まれ変わったような気さえしています。

中越地震のテレビの特集で誰かが「音楽も人間にとってはライフラインだ」と言っていた言葉が耳に残っています。音楽だけでなく、きっと人それぞれに自分にとってのなにかがあるのだろうと思います。本堂でおまいりする方の姿をお見かけするとき、お寺や宗教が暮らしの中でのライフラインになっていたらいいな。と思っていっそう居心地の良い場所にしなければと一人で考え込んだりもしています。（それはお坊さんの仕事ですよね。）

今年も境内の銀杏は小粒ですが豊作です。除夜の鐘つきで差し上げます。開運招福の熊手があたる福引もあります。私の自信作の甘酒を飲みに来てください。来年もよろしくお願いします。寒くなりますがお気をつけてお過ごしくださいね。

行事案内

お札配り

暮れのお経に、お仏壇のある県内の全檀信徒宅にお伺いします。その際に来年のお札をお届けし、法事の当たるお宅には直接お知らせします。

年回忌のお知らせ

妙光寺が葬儀をお受けした方で、来年に法事の当たるお宅には直接お知らせします。法要は土日に集中しますので、日取りのご相談は早めにどうぞ。本堂で法要し、墓参の後「京住院」他でお斉もできます。「京住院」での葬儀は檀徒に限りますが、法事はどなたでもご利用いただけます。お席は十六名が限度です。法事の前後の宿泊も五、六人まで可能です。

星祭祈願

一年間の家内安全、健康、幸福を祈願する「星祭」は一軒二千円です。元旦の法要で祈願のうえ、家族全員のその年の星を記入したお札を差し上げます。新規希望の方のみ、家族全員のお名前と生年を書いてお申込下さい。遠隔地の方は郵送します。

位牌堂安置と命日のご回向

本堂脇の位牌段に、申し込まれた方の位牌を安置して毎朝の法要で月命日に当たる精霊のご回向をします。費用は一軒で年間一万二千円。継続の方はお知らせしますので平成二十二年分を三月までにお願いします。この三十年間分（三十万円）からを永代供養としています。

あとがき

忙しい秋でした。十一月末に講演が続き、暮れは近隣の全ての檀徒宅に伺う〝お札配り〟と正月準備があります。鎌田上人が不在で、永石上人もまだ不慣れなため皆忙しく、今号は永石上人に書いてもらいました。

妙光寺では皆元気です。悪い風邪が心配されます。くれぐれもお大事にお過ごしいただき、気分だけでも良いお正月をお迎え下さい。

（小川）